

## 第107話 本郷区の薬学会会員

薬学雑誌 1902年11月号付録

明治35年の会員名簿を見ると、東京在住477名のうち2割以上の98人が現文京区の東半分、本郷区に住んでいた。二位が日本橋区(66人)、次いで神田(50)、下谷(44)、麴町(29)、浅草(22)と続く。しかし荏原郡(品川、目黒)は3人、豊多摩郡(中野、新宿、渋谷)8人、北豊島郡(日暮里、王子、板橋)11人であった。

移動が徒歩であった時代は、みな都心に住んでいる。日本橋区などは製薬会社、問屋などが集まっているからそこを連絡先に行っている者も多いのだが、本郷区はほとんど居住地である。本郷は加賀前田家以外にも徳川四天王の本多家、幕末の阿部正弘を出した阿部家、大老土井利勝を出した土井家、太田道灌の末裔太田家らの大名屋敷があって、それぞれ森川町、丸山西片町、駒込曙町、千駄木町の住宅地になった。さらには旗本、御家人も多く住んでいた高台で、維新後、新政府の役人、東大関係者、文化人、高級サラリーマンが好んで住んだ。

薬学会名簿を見ると、まず目立つのは東大の南西、本郷弓町。東大衛裁初代教授の丹波敬三、東京薬学校教頭の飯盛挺

造、医学部解剖学教室の初代教授田口和美、文部次官から貴族院議員になった辻新次の4人が会員名簿にある。彼らの住所は、弓町2丁目20番、22番、23番、24番と並んでいた。当然薬学以外のエリートも多く住み、まさに学者町であったのだが、ときに場違いの長唄が流れた。夫人の糸に合わせ丹波が楽しんでいたらしい。なお飯盛は明治6年に創設された医学学校製薬学科の助教として下山、丹波はじめ薬学者の卵たちに物理を教えた。今の弓町はビルばかりだが、辛うじてマンションの奥に瀬川邸が残る。工科大学長、古市公威が住み、娘婿、瀬川昌世医博が継いだものだ。南隣は内科の青山胤通邸だった。

東大の北西、東片町は161番に衛生学初代教授の緒方正規、131番が最初の医学博士、大澤謙二(生理学初代教授)、134番に理学部助手だった天然物化学の真島利行。昔は薬学出身でない会員も多い。中山道を挟む西片町には齋藤寛猛、喜多尾元英。このあたりは今も静かなお屋敷町である。

小林 力